「古代の叡智を呼び戻せ」

■文／北一策

■鋭敏な日本人の皮膚感覚

世界最初のステルス戦闘機誕生に、日本人が手を貸している。
といっても、日本人がステルス戦闘機やステルス被膜を発明したわけではない。
レーダーなどの探知システムから逃れる技術は、第二次大戦当時から研究されていた。木製の合板で爆撃機を作ったらレーダーから探知されにくくなったという話は、イギリス軍やソ連軍が体験している。ドイツではレーダーから探知されないためにカーボン被膜を塗るという手法も考えていた。

ステルス性を得るには被膜状の電磁波吸収体だけではなく、機体設計も重要である。戦後、アメリカではロッキード社やダグラス社がしのぎを削ってステルス戦闘機の開発に取り組んだ。その結晶として本格的ステルス機が誕生したのは 1981 年の「ナイトホーク（F-117)」とも 1990 年の「F-22 ラプター」ともいわれる。これらの第一号ステルス機のステルス被膜を装着したのは日本人の職人である。

アメリカの軍事産業、航空機会社の研究により、機体構造もステルス被膜も理論的に完成し、技術的にも完璧にできあがった。ところがミクロン以下、ナノ単位の、ごくわずかな隙間があちこちに生まれてしまう。そこで第一号機のステルス被膜装着は日本人の職人に委ねられたのだ。微細な最後の仕上げを職人の皮膚感覚が行った。
似たような職人技術の話は、新幹線先頭部の丸み部分の作成時にもある。
ステルス戦闘機の被膜装着も、新幹線先頭部の丸みも、コンピュータが計算し設計することができる。最後の仕上げの微妙な調整も、コンピュータなら可能だ。ただ極小単位の微調整の手間や時間を考えたとき、職人の感覚や作業に頼ったほうが手っ取り早いのだ。第一号機さえ完成すれば、あとは量産も可能になる。ステルス機の場合、その第一号機を日本人職人の皮膚感覚に頼ったのだ。こうした技術は、将来はＡＩが担う仕事になることだろう。
職人に限らず、日本人の手先の器用さ、皮膚感覚の鋭敏さは世界的に定評がある。

日本人の指紋の溝が深いからという説もあるが、そんな差異は認められていない。日本人は箸を使うから指先の感覚に優れているともいうが、これも俗説に過ぎない。では、なぜ日本人の皮膚感覚は鋭敏なのか。脳の動きが他と異なるためである。
これは「日本人の脳」が特別なのではない。日本語を使うと脳の動きがちがってくるのだ。これを「日本語脳」という。

■動物の鳴き声を「言語野」で聞き取る日本人

英語、フランス語、アラビア語、インド語、ベトナム語、中国語、韓国語、ロシア語……。世界には 7000 といわれる言語がある。それらの言語の中には未解明なものもあり、日本語のような働きをする言語が将来見つかるかもしれない。だが現在までのところ、日本語は世界に類例を見ない奇妙な言語である。日本語の細かな分析は機会を改めることとして、日本語だけが持つ興味深い「働き」について考えてみたい。

世界の他の言語と比べて、日本語だけが不思議な能力を持つということを最初に提唱したのは、東京医科歯科大の角田忠信博士だった。角田は 1970 年代に日本人の脳の特殊な働きを主張し始めている（『日本人の脳』1978 年大修館／『右脳と左脳』1981 年小学館）。角田の説はその後も何度か話題になり、ちょっとしたブームを起こしたこともあったが、なぜか注目されず忘れ去られている。

音を聞く脳が右脳なのか、左脳なのかが問題だと角田はいう。
世界中あらゆる民族は、人の話しことばを「言語野」で聞く。言語野は右利きの人の多くは左脳にあり、左利きは右脳にあることが多い。人の話しことばは、世界中の誰もが「言語野」で聞く。
言語野の反対側の脳は「計算野」と呼ばれる。
日本人以外の人は、動物の鳴き声を計算野で聞く。ところが日本人はこれを言語野で聞く。動物の鳴き声だけではない。鳥のさえずりも虫の鳴き声も、世界中のすべての人は計算野で聞き、日本人だけは言語野で聞く。
わかりやすく代表的な例でいうと、日本人は人の話し声を左脳で聞き分ける。そして動物の鳴き声も鳥の声も左脳で聞く。日本人以外の世界中の普通の人は、人の話し声は左脳で聞くが、動物や鳥の鳴き声は右脳で聞くのだ。

日本人は動物の声も鳥のさえずりも虫の音も、「意味のあることば」として言語野で処理しようとする。動物や虫だけに限らない。川のせせらぎも風の音も木の葉のざわめきも、日本人は言語野で聞いてしまう。
いま、わかりやすく「世界中の人」とか「日本人」と表現したが、これは正確ではない。正確にいうと、「日本語を話す人」である。

父系も母系も先祖代々ずっと日本に住む日本人で、生まれた本人も日本人という子供がいたとしよう。この子供が生まれてから少年時代までを英語圏で過ごしたら、その子の脳は「日本語脳」ではなくなる。逆に、両親とも先祖代々イギリス育ちのイギリス人がいて、その子供が日本語の環境で育つと、子供の脳は「日本語脳」になる。「日本語脳」は、遺伝するものではない。環境で手にできるものなのだ。
それでは、幼児から少年期に日本人が英語教育を受けたらどうなるか。その子は「日本語脳」を持つことができない。
インターネットをみてもわかるとおり、世界はグローバルだ。「日本語脳」など、世界で唯一の異質な脳。そんなものは不要――と割り切ってもいいだろう。しかし、10 年 20 年後には日本語が世界言語の主流となっていく可能性が高い。各国で第二外国語として日本語を学ぶようになっていくだろう。すでに一部の人々はそれに気づき、日本語を採り入れようとしはじめている。ロシアのプーチン大統領の２人の娘が日本語教育を受けているのも、もしかしたらその先取りなのかもしれない。

■パイロットやＣＡの飲酒が止まらない

新年早々の１月３日、大阪伊丹空港で出発直前のＡＮＡウイングス機長からアルコールが検出され、乗員が交代したため、５便に遅れが出る騒ぎがあった。１月９日には成田空港でＪＡＬ機長が出発前のアルコール検査をすり抜け、そのまま乗務したことが判明。昨年 12 月にはＪＡＬの女性ＣＡ（客室乗務員）が乗務中にシャンパンを飲んだ問題が大きく報道された。その２カ月前の 10 月末にはロンドンのヒースロー空港でＪＡＬの副操縦士が飲酒で逮捕されている。
パイロットやＣＡが飲酒騒ぎを起こす例は、この数年かなりの数に上っている。飲酒で捕まるパイロットは日本人だけではない。2009 年にはユナイテッド航空の副操縦士が飲酒で逮捕され、昨年６月にはイギリスのＢＡ（ブリティッシュ・エアウェイズ）のパイロットが酒気帯びで禁固８カ月の刑を喰らっている。外国人の例もあるが、やはり日

本人が目立つ。
パイロットやＣＡという職業は、わかりやすくいえばエリートである。社会的にも評価されるべき人たちである。そんな彼らがなぜ非常識な反社会的な行動をとるのか。一般的に過密労働や精神的疲労が原因とされている。あるいは、とくに日本人パイロットなどは、パイロット不足からくる交代要員の少なさが指摘されることもある。だが、そうした諸事情を越えて、もっと根源的な問題が存在しているのだ。その根源的な問題が隠されて、枝葉末節ばかりが問題視されている。根源的問題とは、電離層の異常である。

電離層が異常を起こし、地球に降り注ぐ宇宙線が増大することがある。状況は逆で、宇宙線が増大して電離層を破壊しているのかもしれない。太陽黒点が減少し、銀河系宇宙そのものに異常が生じているという話もある。人間が電磁波を大量に拡散して電離層を破壊しているという情報もある。その細かな状況は機会を改めることにするが、いずれにしても電離層に異常が発生し始めていることはまちがいない。それが航空機の乗員に得体のしれない不安感をつくり上げている。とくに日本人パイロットやＣＡに飲酒癖が増加している理由は、彼らが「日本語脳」を持っているからだ。
日本語脳は、人の話ことばだけでなく、動物の鳴き声も、小川のせせらぎも、風の音も、すべて「ことば」として言語野で判断する。地上より１万メートルも上空を飛行するパイロットやＣＡは、電離層の異常をいち早く察知してしまうのだ。だが自分自身で解決できない状況を前に、彼らはアルコールに逃避してしまう。そのうちに地上の人間も電離層の異常や大気の変化に気づく可能性が高い。そんな地上の人間たちが逃避できるのは、麻薬漬けになることだけなのだろうか。

■日本語に封印された驚異の力

世界は数千年に一度の大転換期を迎えている。金融市場のメルトダウンがまもなく起きるだろう。アメリカが世界の警察官であることをやめ、軍事バランスが壊れようともしている。政治経済のあらゆる箇所で、これまでの枠組みが壊れ始めている。トランプは破壊者だとも、破壊の大魔王はトランプの次に出現するともいうが、こんなときには、世界の政治経済の表層部に起きる破壊や混乱に目を奪われるのではなく、この先の人類、地球の未来を遠望する必要がある。
アカデミズムが語る人類史がどれほど正しいものか、いささか疑念に感じるところもあるが、それはともかく、人類が過去何万年、十何万年の間にいくどもの危機を迎えたこ

とは事実である。その危機のたびに、人類は絶滅直前に追いやられ、あるいはピンチを切り抜けてきた。その記憶が人類のあちこちに残されている。世界の民族が持つさまざまな神話の中にも、その記憶の断片が記されている。そしてその真髄が日本に存在する。古神道の世界である。
縄文時代は1万6000年前から2500年前まで存在したとされる。縄文は世界にさきがける文化を生んだともいわれる。そして縄文よりはるか昔に、日本列島には磨製石器を作り出す世界最先端の文明が存在している。
イギリスの考古学者のJ・ラボックはかつて、磨製石器の出現をもって世界は新石器時代を迎えたと説明した。ところがその後、日本列島の秋田県から奄美諸島に至る135地点から400点超の磨製石器が出現し、世界中が度肝を抜かれている。これらの磨製石器は今から2万5000年以上も昔、なかには4万年以上も昔の地層から掘り出されている。それだけではない。奈良県には大和三山と呼ばれる100メートル級の低山があるが（畝傍山・耳成山・天香久山）、これらは人工的に建設された可能性がある。大和三山だけではない。人工的に造形された二等辺三角形の山々などが日本各地に残されている。これらは何を物語るのだろうか。「ムー大陸」「アトランティス大陸」の伝説、あるいは「失われたユダヤ十氏族」の物語などをはるかに超越した、謎の文化の痕跡が日本列島各地に残っているのだ。

これらの謎を解き明かすことは、危機に直面した人類にとって重要である。この謎を解き明かすカギは、日本語にある。古神道の世界にある。
鳥居も社（やしろ）もない、磐座に祈りを捧げていた時代から、日本人は自然と共に存在した。鳥の声を聞き、風の音を聴いていた。江戸時代に著された『水穂傳（みずほのつたへ）』（山口志道）の中に「ことたま」の本義が書かれている。そこには古代日本に存在した『稲荷古傳』についても記されており、それは楢崎皐月の仲間たちが手に入れようとした「カタカムナノウタヒ」に繋がる叡智に直結する。
人類に残された時間は、わずかしかない。それでもまだ、古代の叡智を取り戻す時間はじゅうぶん存在する。日本語の本質とは何か。心の奥底に眠っている古代の記憶を求めて、これから旅が始まる。